



随 清

行

毎日新聞社

サンザシの実

〔著者紹介〕

きよおかたかゆき
清岡卓行

1922年大連で生れた。本籍は高知県。東大仏文卒。法大教授。詩集『ひとつの愛』（1970，講談社），カラー版『清岡卓行詩集』（1972，角川書店）。評論集『手の変幻』（1966，美術出版社），『抒情の前線』（1970，新潮社）。小説集『アカシヤの大連』（1970，講談社），『フルートとオーボエ』（1971，講談社），『海の瞳』（1971，文芸春秋社），『鯨もいる秋の空』（1972，講談社）。『アカシヤの大連』で第62回（昭44下）芥川賞受賞。

随筆集

サンザシの実

定価 680 円

昭和 47 年 7 月 28 日 印刷

昭和 47 年 8 月 8 日 発行

著 者 清 岡 卓 行

編集人 浜 田 琉 司

発行人 朝 居 正 彦

発行所 毎 日 新 聞 社

〒100 東京都千代田区一ツ橋

〒530 大阪市北区堂島上

〒802 北九州市小倉区紺屋町

〒450 名古屋市中村区堀内町

印刷／中央精版

製本／大口製本

© T. Kiyooka

1972年

検印廃止

0095-500141-7904

随筆集

サンザシの実

目

次

I

ふるさと土佐 11

二十九年ぶりに 11

父の町と母の町 16

隔絶の魅力 19

小説の風土として 22

夜の海の声 26

サンザシの実 31

唐王殿の物語 43

風景の一面 49

地名への幻想 57

札幌 58 摩周湖

59 竜飛岬

60

倉敷	70	長野	71	青島	72
吉野	67	室戸岬	68	鳥取砂丘	69
甲府	64	金沢	65	明石	66
松島	61	前橋	62	今井浜	63

II

「現代詩」という言葉

75

詩人の筆蹟

99

ボードレールの詩句による映画俳優論

106

ブリジット・バルドー

106

ジエームズ・デイン

121

生きがいさまでさ

130

III

寸感一束 153

井目風鈴学派

154

童詩の楽しさ

156

現代語訳と文体

159

銀座の雪

161

見られる旅行

163

練絹の音

165

中也の詩の本質

167

コローの新しさ

169

口づたえの昔話

171

私小説的な原点

173

静雄の戦後の詩

175

モーツァルト賛	177
隨筆の全体性	179
小説は後衛か	182
不等辺三角形の美	184
吉野弘の詩	186
ロマン主義への警告	189
三〇年代と七〇年代	191
望郷の名品	193
日記文学のすすめ	195
実朝の叙景歌	197
小熊秀雄の詩碑	199
水俣病の記録映画	201
詩的自画像の楽しさ	203

IV

忘れがたい小説の女主人公 219

浮遊感覚の一夜 229

森鷗外の詩や短歌の引用 234

私の小説のモデルについて 245

阿藤伯海先生の思い出 246

渡辺一夫先生遠望 260

原口統三 265

あとがき 273

随筆集
サンザシの実

装
幀

熊
谷
博
人

ふるさと土佐

二十九年ぶりに

高知県は私にとってふしぎな場所だ。それは父母が生れて育ったふるさとであるが、私にとっては住みついたことのない本籍地である。

私が生れて育ったところは別にある。それはかつての日本の租借地関東州の大連で、私はそれを心の中で「風土のふるさと」と呼んでいる。しかし、それはすでに幻の都会で、現実の生活をときたまでも支えてくれる地盤ではない。そのためか、私は一方において「言語のふるさと」を意識してきた。それは断るまでもなく、生活のよりどころとしての日本語である。

このような経験をしているひとは、きっと多いのではないかと思う。幼少年時代を台湾や朝鮮や満州などで送り、第二次大戦の敗北を通じて、日本のどこかに引揚げるといのが、そうしたいわば植民地二世あるいは三世における、生活の変化の基本的な型であった。ふるさとの問題において、日本の歴史の流れの中で、大きく横にはみでている例外的な集団と見ることもできよう。

そのような場合、本土における父母や祖父母のふるさととは、へんに眩しいものであるにちがない。なじみはないが、他の地域とどこかちがう懐かしさがあるはずだ。都会であっても田舎であっても、その古い時間に自分の血が微かに通じているような、恥ずかしさと誇らしさの混りあった、奇妙な思いがいただけることだろう。

私にとっても高知県は、いつも忘れることのできない、そうした遠いへ血縁のふるさとである。今度私は、四日間の短い日程ではあったが、ひさしぶりに父母のたぶん根源的な生活感情をかたどってくれるその土地を踏んで、やはり胸があやしく騒ぐのを覚えずにはいられなかった。ひとつには、私の青春時におけるある体験を、せつなく反芻したということもかわっていただろう。

以前に私は、高知県に二回しか行ったことがない。それは昭和十八年の秋と冬で、学徒動員の

徴兵検査と召集のときである。旧制高校三年生の私は、やりばのない絶望的な気持をいだいたまま、東京を朝早く急行列車で発ち、岡山で一泊、宇野から高松までは連絡船、あとは四国山脈を普通列車でゴトゴト横切った。たしかそんな旅程であったが、一兵卒として戦争にかりだされるであろう前途は、真暗であった。

それから二十九年。私は飛行機を利用せずに、普通りの鉄路と水路をたどってみた。ひさしぶりに接する印象的な空間が、過去を喚起する力はやはりすばらしい。夕ぐれの大歩危・小歩危の溪谷を眺め、窓を少し開いて、すがすがしい空気を吸ったところから、私は今と昔の二つながらの雰囲気、しだいに身が包まれてくるのを感じた。

昔もあの憂鬱な気分の中に、自分の本籍地はどこなところだろうという一縷の期待が流れ、それがやがて大きくなり、喜びの感情と呼べるほどのものにまでふくらんで行ったことを、私はありありと思いだした。二十歳すぎのころのそんな心理の動きが、いわば四国山脈の起伏にからみついているのである。

昔とはつきりちがうのは季節で、夕闇の山地に浮かぶ桜の花の満開に近い白さが、言いようもなく爽やかであった。鄙びた舞台の上で、そのさびしい美しさは、純粹に古典的であるように見えた。

私はその情緒にむしろ、雛壇で雪洞に淡く照らされている造花の桜を連想した。幼少年時代に、私は大連の公園や海岸に咲く桜よりも、自分の家の雛壇の造花のそれに、古い日本を感じていたが、そうした心の傾きが、まだ生きているらしかった。

つまり「血縁のふるさと」に私は、古い日本の時間と直接に結びつくものをも、無意識的に感じたがっていたのだろう。

ふるさとという意識は、単純であると同時にきわめて複雑である。それは私の場合、「風土」と「言語」と「血縁」に分裂するというふうにしるしたが、たとえば「血縁」はその系統を縦と横にひろがらせながら、ある遠い時代の風俗の「コマ」を想像させたりする。

こうした相対性は、もちろんほかの場合にも認められる。極端な言い方をすれば、月から眺めるときは、地球が「風土のふるさと」で、けだものの群の中で暮すときは、人間の音声が「言語のふるさと」だろう。

高知県にたどりついて、私は父母だけではなく、自分に親しく思われるひとびとがこの土地でどのように生きたか、そのさまざまな時間に少しでもまじわりたいと感じはじめていた。それはやはり、受動的な期待だけでいっぱいであった青春時における訪問のときとは、ずいぶん異なる心の動きであっただろう。